

第1章 構内遺跡と調査の概略

1 構内遺跡の発見と調査の歴史

京都大学は、京都市北東部の北白川扇状地と鴨川の氾濫原上に立地している。北白川扇状地は微高地をなし、白川の清流から良質な飲料水を得られるため、縄文時代早期から人々の生活の場として利用されてきた。鴨川の氾濫原は平安時代後期頃治水工事等によって利用できるようになった土地である。このような地形的・歴史的背景を持つ京都大学内には、農学部構内遺跡、教養部構内遺跡、医学部附属病院構内遺跡⁽¹⁾の3遺跡が存在している。

京都大学構内で最初に発見されたのは農学部遺跡である。大正12年浜田耕作が発見し試掘調査を行なった。京都府南部で最初に発掘調査された研究史上重要な縄文時代の遺跡である。その後同じ北部構内⁽²⁾では昭和47年に弥生時代前期の追分地蔵遺跡、昭和48年に農学部遺跡の平安時代後期の瓦溜遺構、縄文時代後期の配石・甕棺遺構が出土した植物園遺跡を発見した。現在では地点と時期の異なる4つの遺跡を総称して京都大学農学部構内遺跡と呼んでいる。次に発見されたのは教養部遺跡である。昭和47年に藤岡謙二郎が調査を行なった縄文時代後期と平安時代の遺跡である。同じ教養部構内では昭和51年に弥生時代前・中期の遺跡を発見した。最後に発見されたのは病院内遺跡である。昭和51年に川上貢・岡田保良が調査を行なった平安時代以降の遺跡である。このように広大な遺跡群を構内に持っているにもかかわらず、大学の発掘調査は大正12年の調査以降長期にわたって中断し、昭和47年まではほとんど工事現場から遺物を採集してくるにとどまっていた(第1表)。昭和46年農学部校舎の全面改築工事が開始され、次々と遺物が出土し始めたが、京都大学は発掘調査を行なわなかった。これに対して昭和47年に京都市文化観光局文化財保護課から行政指導があり、その後文化財保護法に基づく建物予定地の事前調査が行なわれるようになった。また今年度からは周知の遺跡周辺の建物予定地についても試掘もしくは立合調査を行なうようになった。京都大学は本部地区のほかにも遺跡上に立地する附属機関がある。昭和47年に大阪府安満遺跡を、昭和51・52年に和歌山県白浜町瀬戸遺跡を、当地の教育委員会等と協議のうえ、京都大学が主体となって建物予定地の事前調査を行なっている。

出土した遺跡については、安満遺跡の条里遺構と農学部遺跡の瓦溜が大学関係者との協議によって、建物予定地を変更することになり現地で保存され、植物園遺跡の配石・甕棺遺構は遺跡の東側に移築して保存されている。(泉)

第1表 おもな構内遺跡調査の年表

地点に関しては図版52参照

年 度	遺 跡 名	地点名	担 当 者	調査の種類	出 土 遺 物	文 献	そ の 他
大正12年	農 学 部	A・B	浜 田 耕 作	表 採 お よ び 試 掘	縄 文 土 器 ・ 石 器 他	浜田23, 島 田24	
13年	農 学 部	不明	藤本理三郎		石 棒	佐 原 60	
昭和25年	農 学 部	C	羽 館 易	採 集	縄 文 土 器		
46年	農 学 部	D	石 田 志 郎	採 集	弥 生 土 器		
47年	農 学 部	E		採 集	石 棒		
	大阪府安 満		小 野 山 節	事 前 発 掘	弥 生 土 器 ・ 石 器 他	小 野 山 73	条里の溝 出土, 建 物をずら し保存.
	迫分地蔵	F	中 村 徹 也	事 前 発 掘	弥 生 土 器 ・ 縄 文 土 器 他	中 村 72	
	教 養 部	G	藤岡謙二郎	工 事 中 採 集 ・ 実 測	縄 文 土 器 ・ 他	藤 岡 72	
48年	農 学 部	H	中 村 徹 也	事 前 発 掘	瓦 (平 安) ・ 縄 文 土 器 他		瓦溜出土 埋戻し.
	農 学 部	I	中 村 徹 也	事 前 発 掘	縄 文 土 器 ・ 土 師 器	中 村 73	
	農 学 部	J	中 村 徹 也	事 前 発 掘	縄 文 土 器 他		
	植 物 園	K	中 村 徹 也	事 前 発 掘	縄 文 土 器 他	中 村 74 a	縄文後期 配石・甕 棺遺構出 土
49年	農 学 部	L	中 村 徹 也	事 前 発 掘	縄 文 土 器 他	中 村 74 b	
	植 物 園	K		配 石 等 取 上		中 村 74 a	
昭和49年	農 学 部	M	中 村 徹 也	事 前 発 掘	縄 文 土 器 他	中 村 75	
50年	教 養 部	N	中 村 徹 也	事 前 発 掘	縄 文 土 器 他	中 村 76	
51年	農 学 部	2	泉 拓 良	事 前 発 掘	縄 文 土 器 他	本 年 報	
	病 院 内	5	岡 田 保 良	事 前 発 掘	瓦 ・ 土 師 器 (平 安) 他	本 年 報	
	和歌山県 瀬戸遺跡		中 村 友 博	試 掘 調 査	縄 文 土 器 ・ 弥 生 土 器	本 年 報	

2 京都大学構内遺跡調査会

昭和47年11月以降北部構内の建物予定地の事前調査を京都大学で行なうことになり、昭和48年4月には調査担当の助手1名が文学部考古学研究室におかれた。同年7月「京都大学敷地における遺跡の保存と新築計画等との調整のため必要な事項を審議し、遺跡の保存について遺憾のないようにする為」京都大学遺跡保存調整委員会が設置された。しかし助手1名の体制で昭和47年11月以降昭和49年12月まで26ヶ月中20ヶ月が発掘調査（立合調査は含まず）という過密スケジュールで調査を行なわざるをえなかったため、臨時職員問題がおこった。その結果「構内建設計画に関連する埋蔵文化財の調査と保存のため」埋蔵文化財調査室が昭和50年3月に設立され、職員2名がおかれた。しかし「雇用問題をめぐる紛争が続き、調査室の機能が麻痺し正常な業務が行なえない状態に立ち至り」昭和51年12月埋蔵文化財調査室は閉鎖され、埋蔵文化財調査室が担当する予定であった農学部農林生物学科等研究室実験室新営工事に伴う事前調査が不可能になり、大学の建物新営工事は一時中断してしまった。昭和51年5月京都市文化観光局文化財保護課と京都大学施設部と文学部考古学担当教官とが協議を行ない、教育研究機関を持つ国の機関であるので、なるべく独自での調査を行なうようにとの指導を受けた。京都市内における個々の調査ごとに、調査会を作る事は望ましいことではないという京都市の意向をうけて、今年度限りの本学教官が調査を担当する京都大学農学部構内遺跡調査会を設立した。また8月には和歌山県西牟婁郡白浜町理学部附属瀬戸臨海実験所の宿舍新営建物予定地が瀬戸遺跡に含まれていることがわかり、和歌山県の指導のもとに京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会を設立した。両調査会を通称として京都大学構内遺跡調査会と呼ぶことにした。

京都大学農学部構内遺跡調査会の構成 京都大学からの委託による、農学部農林生物学科等研究室実験室新営工事に伴う発掘調査研究事業を目的として、昭和51年6月発足した。しかし8月病院内遺跡が発見されたため、今年度の本部地区全体の事前調査を行なえるように規約を改正し、調査委員会の下に個々の調査班を編成することにした。調査会・調査班の設立と発掘調査について、常に指導と助言をいただいた山口県教育庁文化課中村徹也氏、京都市文化観光局文化財保護課浪貝毅氏に謝意を表するものである。

	氏 名	職 名		氏 名	職 名
会長	横尾義貴	工学部教授	委員	石田志郎	理学部助教授
顧問	村田治郎	京都大学名誉教授		泉拓良	文学部助手

委員	川上貢	工学部教授	委員	山田晶	文学部長
	中戸克二	農学部長	監事	鹿野英夫	農学部事務長
	中山忠之	京都市文化観光局文 化財保護課長		竹田保	医学部附属病院管理 課長
	西村敏雄	医学部附属病院長		竹原正	医療技術短期大学事 務長
	林屋辰三郎	人文科学研究所長			
	樋口隆康	文学部教授		西村利雄	施設部企画課長
	藤岡謙二郎	教養部教授	事務員	大八木邦雄	
	村地孝	医療技術短期大学部 主事	事務補助員	中村美代	

農学部遺跡調査班

班長 泉拓良 文学部考古学助手

調査員 吉野治雄（施設部技術補佐員） 上原真人（大学院博士課程1年考古学専攻）
宇野隆夫（大学院博士課程1年考古学専攻） 鎌田博子（大学院修士課程2年考古学
専攻） 中堀謙二（大学院博士課程3年森村生態学専攻）

調査補助員 10名

なお整理に参加した調査補助員は、上村和弘 深沢芳樹 藤原喜信 家根祥多である。
発掘調査と資料整理に関して小林行雄 近藤喬一 檜崎彰一 吉本堯俊各氏と 平安博物
館 理学部地質学鉱物学教室 農学部農芸化学教室 工学部建築史研究室 文学部考古学
研究室各機関の指導と助言・協力を得た。

職名は就任当時のものを用い、京都大学の職員と学生については大学名を省略した。

病院内遺跡調査班

班長 川上貢 工学部建築史教授

調査主任 岡田保良（大学院博士課程2年建築史専攻）

調査員 佐野修（研究生資源工学専攻） 谷直樹（大学院博士課程3年建築史専攻）

堀内明博（研究生建築史専攻）

調査補助員 38名

なお整理に参加した調査補助員は、磯野英生 清水朱美 田中はる代 津隈久美子 中
内均 浜崎一志 藤井肇 藤井留美子 古玉尚 三木佳代子 三原由紀 宮本敏男である。
発掘調査と資料整理に関して梅川光隆 沢田正昭 杉山信三 鈴木重治 津田菊太郎 檜

崎彰一 福山敏男 峰巍 山本忠尚各氏と、工学部建築史研究室の指導と助言・協力を得た。

職名は就任当時のものを用い、京都大学の職員と学生については大学名を省略した。

京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会の構成 京都大学からの委託により、理学部附属瀬戸臨海実験所内宿舍新営工事に伴う発掘調査研究事業を目的として、昭和51年9月に発足した。

	氏 名	職 名		氏 名	職 名
会長	横尾義貴	工学部教授	委員	巽三郎	和歌山県文化財保護
委員	石田志郎	理学部助教授			審議会委員
	泉拓良	文学部助手		時岡隆	瀬戸臨海実験所長
	井上至	和歌山県教育庁文化		林屋辰三郎	人文科学研究所長
		財課長		樋口隆康	文学部教授
	羯磨正信	和歌山県文化財保護		溝畑茂	理学部長
		審議会委員	監事	位ノ花一郎	理学部事務長
	小山富造	白浜町文化財保護審		西村利雄	施設部企画課長
		議会委員			

瀬戸遺跡調査班

班長	泉拓良	文学部考古学助手
調査主任	中村友博	大学院博士課程3年考古学専攻
調査員	清水芳裕	研修生考古学専攻
協力者	伊勢田進	(和歌山県立田辺商業高等学校教諭)
	大原満	(和歌山県立南紀高等学校教諭)
	檜山喜朗	(理学部技官)
	田口雅朗	(理学部事務官)

職名は就任当時のものを用い京都大学の職員と学生については大学名を省略した。(泉)

3 昭和51年度調査の概要

昭和51年度の京都大学構内の埋蔵文化財調査は29件である。そのうち農学部構内遺跡調査会が受託したのは発掘から概要出版までの調査2件、発掘だけの調査1件で、理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会が受託したのは発掘から概要出版までの調査1件、発掘だけの調査1件である。8件の試掘調査と11件の立合調査に関しては、農学部構内遺跡調査会の協力で泉拓良、吉野治雄、梅川厚子が行なった。農学部附属安満農場内の立合調査は大阪府高槻市教育委員会に、理学部附属シュミット望遠鏡観測室建設用地の遺跡確認調

査は奈良県大守佗町教育委員会に依頼した。植物園内遺跡の移築保存第2期工事は泉拓良、吉野治雄、梅川厚子が指導監督して大垣セメント工業に施工させた（第2表）。

調査の方法は原則として、本部地区構内すべての建物・埋設管の予定地を調査の対象とした。周知の遺跡内の予定地は、仮設の建物は立合調査とし、それ以外は掘削の深さに関係なくすべて手掘りで試掘調査を行い、立合調査か発掘調査かのいずれが適しているかを判断した。周知の遺跡以外の建物予定地については機械で試掘調査をしてから発掘調査の必要性を判断し、その他については立合調査を行った。発掘調査と立合調査の区分は、遺構面を破壊する建物等の予定地は全面発掘、遺構面を破壊しなくても埋蔵文化財の資料が不足している地域や今後長期にわたって調査が不可能になる建物予定地は発掘調査、包含層の一部を破壊するだけの埋設管や仮設の建物予定地は立合調査という基準を設け、京都市と協議のうえ判断した。

今年度の調査の結果、京都大学構内東西約1km、南北約2.5kmの間に遺跡が存在していることがわかったので国土座標に従って1辺50mの仮設グリッドを作った。構内の各地点は百万辺交差点南西の50mグリッドをBA21の基準グリッド⁽³⁾とし、北へBB南へAZ、東へ21西へ19と変化する記号で表示する（図版52）。たとえばBD35はBA21から150m北750m東のグリッド、すなわち植物園遺跡の所在を表わす。今後地点の表示はこのグリッドで示すことにする。

第2表 昭和51年度調査の概要

所在地に関しては図版52参照

調査年月日	No.	担当者	所在地	種類	主要遺構	年代	その他
昭和51年 4月	1	泉	教養部AL 24	立会	瓦溜・溝	弥生時代・平安時代	工事を中断して一部発掘、遺跡発見届提出
7月	2	泉	北部BE33	発掘	縄文時代土壇・不定形ピット群・井戸・集石ピット・東西溝	縄文時代～弥生時代、古墳時代以降	面積880㎡、期間7月1日～11月6日
	3	泉	北部BK30	立会	なし	江戸時代以降	工事続行
8月	4	泉	病院AE15	試掘	ピット	平安時代以降	面積32㎡、遺跡発見届提出、工事中断
	5	岡田	病院AE15	発掘	池・溝・柱穴・井戸・土器溜	平安時代以降	面積2200㎡、期間8月20日～12月8日
	6	岡田	病院AH17	試掘	なし	平安時代以降	施工予定地の発

調査年月日	No.	担当者	所在地	種類	主要遺構	年代	その他
							掘調査決定
昭和 51 年	7	泉	北部 B F 28	試掘	な し		面積 4 m ² , 出土遺物なし, ただし工事の時に立会調査
	8	泉	本部 A V 28	立会	な し	鎌倉時代以降	工事続行
	9	中 村	和歌山県西牟婁郡白浜町瀬戸 姿	試掘	な し	縄文～弥生時代	面積約 50 m ² , 工事予定地の一部発掘調査必要
	10	大 宇 陀町町	奈良県宇陀郡大宇陀町カタブキ	遺跡確認	な し		遺跡ではない
10 月	11	泉	本部 A V 27	試掘	な し		面積約 32 m ² , 遺物は細片, 工事の時立会い
11 月	12	泉	本部 A V 27	立会	な し		工事続行
12 月	13	泉	北部 B E 34	立会	な し		工事続行
	14	泉	北部 B D 29	立会	な し		工事続行
	15	泉	北部 B F 28	立会	な し		工事続行
	16	泉	病院 A I 18	試掘	溝	平安時代以降	面積 24 m ² , 一部を発掘調査, その他を立会調査に決定
	17	吉 野	北部 B D 35	立会	な し		甕棺移築
	18	泉	本部 A V 23	立会	な し		黄砂下に黒色土層 (無遺物)
	19	泉	本部	立会	な し		黄砂下に黒色土層 (無遺物)
	20	泉	本部 A V 29	立会	ピット	鎌倉時代	工事続行
	21	泉	本部 A Z 28	立会	な し	縄文時代	黄砂下の黒色土から縄文土器の細片出土
	22	泉	病院 A T 25	発掘	溝・井戸・集石ピット	平安時代以降	面積約 220 m ² , 期間 1 月 20 日～2 月末 (予定)
昭和 52 年 1 月	23	吉 野	教養部 A S 23	試掘	溝	縄文時代・良時代	面積 8 m ² 工事の時に立会必要
	24	宇 野	北部 B J 33	試掘	な し	縄文時代	面積 8 m ²
	25	泉	医学部 A P 18	立会	な し	平安時代以降	工事続行
	26	泉	病院 A I 18	立会	石敷	室町時代以降	一部実測, 工事続行

4 構内における史跡の文献的考察

京都大学の構内敷地が大学設立以前にどのような用に供されていたのか、とくに平安京遷都以降、京内とのかかわりにおいて鴨東に所在する大学構内の土地の歴史的蓄積の如何を史書・古記録を検討して大要を列挙しよう。

はじめに、構内がおよそ部局別に区別されるので、それらの現在の町名と明治21年以前の旧字を比較対照し、京都大学の所管に帰した年時を参考に掲出する。

本部構内	左京区吉田本町	吉田村の冠石・六反・御館	明治30年	(旧第3高等学校)
教養部構内	〃 吉田二本松町	吉田村の二本松・走矢倉	昭和24年	(旧第3高等学校)
南部構内	〃 吉田近衛町	吉田村の一町が辻	明治32年	
病院構内	〃 聖護院川原町	聖護院村の西畑・堀の内	明治32年	
基礎医学構内	〃 吉田桶町	吉田村の堀の内・窪・野守・下阿達	明治34年	
北部構内	〃 北白川追分町西町	白川村の追分・小橋井	大正10年	
西部構内	〃 吉田泉殿町吉田牛の宮町	吉田村の泉殿・牛の宮	(旧京都高等工芸学校)	
薬学部構内	〃 吉田下阿達町	吉田村の下阿達	昭和32年	(旧京都織物)
熊野構内	〃 東竹屋町	上京32番組	昭和20・30年	(旧日国工業株式会社)

上記のように、現状にみる大学構内の占地はおよそ西は鴨川、東は吉田山・黒谷の丘・北は御蔭通り、南は疎水夷川 流に限る範囲に大きくひろがっていることが知られる。大学構内には今日では大学創設以前にさかのぼる歴史的遺構は旧三高・旧京都織物関係建物をのぞいては現存していない。しかし、上記の範囲内に拡張すると、大学敷地に近接して古くさかのぼる史跡・遺構が多く所在している。例えば吉田神社・護院・熊野神社・後二條天皇御陵・百万遍知恩寺をあげることができ、現在もなおその存在はこの地域の生活と密接なつながりを維持している。しかし、古くさかのぼると平安遷都以来の平安京と中世以降の京の町に居住した人々と鴨東のこの地域は多くのつながりをもって長い年月を経過してきた。そして、この地域には今日ではその姿は地上にはとどめていないけれど、地下に埋蔵されている歴史的遺跡の存在の可能性が大きい。

北部構内 北白川扇状地の南端部に所在し、既に早く大正12年に縄文人の生活遺跡が構内に発見されており、京都では珍しい先史遺跡として注目されていた。昭和47年以降

には縄文期の石棒が偶然に発掘され、つづいて縄文後期の配石・甕棺遺構を出土している。

歴史時代の遺跡は本構内東寄りの湯川記念館敷地で建物建設中に平安時代の瓦が出土したことが知られており、古代遺跡の存在が推測させられる〔杉山54〕。『日本紀略』貞元二（977）年四月二十一日条に天台座主良源が神楽岡吉田寺で舍利会を修したことがみえ、『天台座主記』にはこの吉田寺は「神楽丘西吉田社北」に所在し、舍利会のために重閣講堂結構数字雑舎を建立したと記している。吉田寺については『吉記』養和元（1182）年九月二十二日条、中山観音堂の割注に「号吉田寺、寺僧云吉備大臣建立」とあるところから、岡崎西福ノ川町にその位置を推定する中山吉田寺をもってあてるとの説がある。この中山吉田寺と上出の神楽岡吉田寺は別寺であろうと杉山信三氏が一説をたてている〔杉山54〕。さらに杉山氏は『権記』長保三（1001）年六月二十日条記事「吉田社北三丁内有葬送之處」と『小右記』永祚元（989）年九月二十六日条にみえる「吉田卒堵婆供養所」を同一所と見做し、北白川追分町附近がその位置にあたるのだらうと推定する。百万遍より東へ市電が銀閣寺まで開通した折に、北部構内附近の道路建設中に多数の石仏や五輪塔が出土したことも、この葬送所と関係があるのだらう。この葬送所に附属した寺院が神楽丘吉田寺であろうというのが杉山説である。

また、北白川追分町の旧市電停留所農学部前の道北に後二條天皇御陵が所在することも上出の吉田葬送所と無関係ではない。『山州名跡志』にこの御陵東にかつて正法寺と呼ぶ寺院が所在したと伝え、「此所土中より瓦石等今猶出づ。由来不詳」と記している。なお、同志は御陵附近をもって北白河殿跡にあてているが、北白河殿は後高倉院の妃北白河院陳子の御所として造立され、妃の死後はその御子の安嘉門院邦子（弘安六（1283）年薨）にうけつがれ、その位置は北白川久保田町北方と推測される〔杉山57〕。

本部構内 本部構内は明治20年に大阪より移転開設をみた第三高等中学校敷地を前身とする（京都坊目誌所収）。それ以前には幕末に尾張藩吉田屋敷があり、ほぼ同一の敷地規模をもっていた。これらの施設が設立されたために、白川村から京内への最短の経路として古い歴史をもつ白川道が中断されてしまった。本構内東北隅に位置する東門近くに中断された白川道の一部をのこしており、そこから本構内を対角線方向に横断して構内西南隅へ抜けていた。本構内西南隅の外側にたつ道標にかつての白川返の名残りをみいだす。なお、この道標附近の路傍にはかつて弥勒石像を安置した弥勒堂が所在していたことが寛保元（1741）年刊京絵図に示される。

さて、本構内の歴史遺跡には上出の吉田寺・吉田葬送所が構内東北部におよんでいたこ

とを推測させる。明治40年頃にこの附近から礎石・古瓦を出土したことが『京都坊目誌』に記され、建築学教室周辺で平安初期にさかのぼる古瓦が発見されていることに注目される〔杉山54〕。

教養部構内 吉田神社の本社々殿は現在神楽岡の西麓の小高い位置に所在する。応仁二（1468）年七月四日の兵火に社殿を焼失し、延徳元（1489）年～明応元（1492）年のあいだに復興したときに位置を移して現在の場所に社殿が造立された。焼ける以前の旧社地の位置について最近福山敏男氏が推定されている〔福山77〕。即ち、先出の神楽岡吉田寺の位置から推定すると、吉田神社の旧地は本部構内南部か教養部構内が一応考えられる。しかし、永徳四（1384）年二月二十四日の將軍義満寄進状に社頭の四至を定めており、東は神楽岡山の西、南は近衛末、西は河原、北は上御門末を限りとし、ほかに吉田泉殿跡の一部を加え神領として寄進している〔京都坊目誌所収〕。

社頭の北限土御門末は構内では旧字二本松と旧字走矢倉、構外東では吉田上大路町と吉田中大路町の各境界線にあたる。そこで、構内南半部とその南の吉田寮・楽友会館とそれらの東方吉田中大路町がほぼ社頭四至の範囲内の旧社地にしぼられる。また、江戸時代の地誌によると『山州名跡志』は吉田村西北一町の二本松附近、『山城名勝志』は吉田山の西、今二本松のある所を旧址に、先出の弥勒堂東南の地を若宮殿跡にあてている。二本松は現存せずその名残を旧字名にとどめるとすれば、構内北半が地誌にいう吉田社旧社地にあたることになる。この位置は上出の義満寄進状四至の外にあり具合が悪い。そこで福山説では構内南部を吉田社旧社地であろうと推定している。

南部構内 教養部構内の南端に所在する吉田寮・楽友会館の土地は旧字を一町が辻と呼び、旧字走矢倉と区別されていた。一町が辻とその南の旧字近衛の境界が近衛通であり、吉田旧社地はこの近衛通を南限とするため、一町が辻も旧社地に含まれる。

ところで、一町が辻の地にはかつて高陽院藤原泰子の墓所があったと『京都坊目誌』にみえる。高陽院は鳥羽法皇の後で、平安末の仁平元（1151）年に熊野神社領のうちに御堂御所福勝院を造立している。そしてその薨後には遺体は同御所内の護摩堂下に埋葬された。この事に関して熊野神社境内に埋葬することに願る怖畏ありとの世評を生んでいる〔兵範記〕。

高陽院の葬送記事⁽⁵⁾から福勝院の御堂南西門が近衛通に所在したことがみえ、御所の位置を近衛末以北、鴨川以東、東山以西が推定される。そうすると、前出の吉田社旧社地と重複することになる。また、応永三（1396）年將軍義持の熊野神社境内管領を聖護院に命じ

た文書があり、境内四至は「近衛以南、大炊御門以北、今辻子以西、至千河原（除崇徳院、大吉祥院敷地）」とある⁽⁶⁾。先出の吉田社社頭四至を参考にすると、室町時代初期には近衛通を境にして以北を吉田社、以南を熊野社の各境内に区分していることが知られる。応永三年頃にはもはや福勝院は姿を消していたようで、熊野神社境内四至のうちに特記されていない。吉田社との境界線が近衛通であったことになると、熊野神社境内に含まれる福勝院は近衛以南に位置したことになる。しかし、これら両社の四至は室町時代において設定されたもので、平安・鎌倉時代までさかのぼらないとすれば支障はない。

福勝院の御堂は東面してたつ九軀阿弥陀堂で、『兵範記』所収指図⁽⁷⁾によると、堂の桁長総柱間は十三間、左右の廊を加えると南北行延長は二十二間以上になる。一間の柱間を仮に7尺とすれば総長は154尺以上になり、これらを収容する御所敷地は方一町ではおさまらなくなる。

また、上記の近衛末が今日の近衛通りに一致するのか、あるいは杉山信三氏の説のように南へズレるのか、確証はない〔杉山62〕。

旧字近衛の南限をもって近衛末と考えれば、福勝院の位置は現在の近衛通を中心にそのにひろがる吉田近衛町（旧字一町が辻を含む）の範囲に推定できる。

医学部・病院構内 この地区は南は春日通（平安京の中御門大路末）、東は東大路、西は鴨川、北は旧白川道に限られる範囲をいう。『京都坊目誌』に崇徳院御影堂址について「今詳ならず。古へ栗田宮敷地中にあり。今字西畑にある。帝国大学医院内に崇徳帝宝物塚と称するものあり。栗田宮に縁由あらん。猶後勘すべし」とみえる。ここにみえる字西畑は南は春日通、北は精神科教室と旧京都織物の境界線、西は鴨川、東は東大路に限られ、そのうちの帝国大学医院とはほぼ今日の病院外来本館のたつ附近と考えられ、かつて、崇徳院宝物塚と呼ぶものが所在していた。今日では病院構内にはそれらしいものはみあたらない。また、この塚に関連するものとして栗田宮・崇徳院御影堂をあげているが、栗田宮は寿永二（1183）年に崇徳院と宇治左府頼長の悪霊をしずめるために創始された仁祠で、保元合戦の戦場となった春日河原に所在していた（『吉記』寿永2，12，29条，寿永3，4，15条）。

江戸時代の地誌類に、聖護院の森（熊野神社）の西北一町余の所をさして「崇徳田」といい、この地が崇徳院をまつる社跡であろうと推定している。これを現状にあてはめると、外来本館の西部・旧眼科教室附近にあたる。ところで、栗田宮創始当時の春日河原と呼ぶ地点は、春日は京内の春日小路（今日の丸太町通）をいい、その鴨川東へ延長上、鴨川に

近い地点と考えると、それは熊野神社の西方、鴨川に近い場所が考えられ、上記の崇徳田の位置とズレる。『百練抄』嘉禎三（1237）年四月二十七日条に、栗田宮が川辺に近いので洪水の恐れがあるため、東方へ遷座させたことを記している。この後世における栗田宮の位置の移動を考慮にいとると、上記の春日河原と崇徳田の位置のズレは解消する。

さて、栗田宮の創立由緒にあげられる保元の乱戦場になった白河北殿にふれておこう。⁽⁸⁾

白河北殿は白河上皇のために越前氣比神主が造進した御所であり、元永元（1118）年七月十日に完成移徙が行われた。その位置は大炊御門末の比、鴨川の東、春日末の南（『保元物語』）に所在したようで、南に大路をへだて、白河泉殿が早く造立されていた。これらの御前は法勝寺が承保二（1075）年に造立されたことにはじまる法勝寺周辺地区の開発と深いつながりをもつものであった。そしてその後に六勝寺などの寺院群がたちならぶ一層の発展期を迎えた。白河北殿もまた大治四（1129）年に改造拡張され、さらに長承三（1134）年に北殿に付属して東御所が造立された。康治元（1142）年に造立された白河御所東辺小御堂は民部御頭頼が造進しているので、同じ頭頼が造進した東御所の郭内に所在したのであろう。

白河殿は天養元（1144）年五月八日に焼失したが、直ちに再建に着手し、同年十月に皇皇后の遷御がみられる。また、仁平元（1151）年には東御所の池中島に多宝塔が造立された。保元元（1156）年七月、鳥羽法皇の崩御間もなしに白河北殿は崇徳上皇の御所に使用され、七月十一日の保元の乱の戦場となり焼失した。⁽⁹⁾

白川北殿に接して鳥羽院皇女の前斎院御所が所在していたが北殿と同時に焼失している。なお、保元の乱がおきる8年前の久安四（1148）年三月十日夜に北殿北辺に所在した御所預東市正正経宅と故民部卿頭頼宿所弁小屋が焼失している〔本朝世紀〕⁽¹⁰⁾。このことは白河北殿の北辺には御所に奉仕する院近臣や御所預りなどの役宅が軒をならべていたことを物語っている。

乱後の平治元（1159）年に白河千軀阿弥陀堂が造立供養されたが、その位置について『百練抄』に「大炊御門以比讃岐院御所保元戦場爲灰燼之跡」とあり、平清盛が造進したものであった。この堂と先出の同じ戦場跡にいとなまれた栗田宮との位置関係は重複することになる。『愚管抄』ではこの堂の造立年時の先後に思い違いがあるが、その位置を「白河ノ中御門河原ニ〇千軀ノ阿弥陀堂の御所云々」という。これは白河北殿の北限が中御門末（現在の春日通）までひろがっていたことを思わせる〔大治四年の改造拡張による〕。

先生の聖護院が管領した応永三年頃の熊野神社境内四至のうちに含まれる崇徳院は栗田

宮をさしている。熊野神社は聖護院の開祖増誉が康和五（1103）年に創立しており、聖護院に近く所在していたことは今日も変わらない。ただし、今日ではその境内は縮小されてかつての面影はないが、室町時代の境内は白河北殿地を含め、北限は近衛末までひろがっていた。この境内地の一郭を占めて栗田宮が別郭を形成していた。

栗田宮は康元元（1256）年に焼失、再建されたが応仁二（1468）年に再び被災してその後復興されなかった。最近、福山敏男氏は栗田宮の位置について、諸記録を検討され、嘉禎三年移転後は旧市電丸太町新道停留所の南側附近と推定され、創立当時は移転地の西一町～二町ほどの地点と主張されている〔福山77〕。もし、そうだとすればその推定地は熊野寮が立つ敷地の西部附近に求められる。また、その敷地全体がさらに栗田宮以前の白河北殿跡と見做される。

白河北殿跡が中御門末（今日の春日通）を超えて病院構内へひろがるかどうか文献上は可能性が薄いだが、今回の医療技術短期大学部校舎建設地の発掘調査で白河北殿と同時代頃の遺跡・遺物が出土していることは白河北殿との関連性を全く否定することはできない。⁽¹⁾

西部構内 構内のほとんどが旧宇和泉殿の地積であることに注意される。この地にはさつて鎌倉時代に西園寺公経の吉田泉殿が所在し、天福元（1233）年七月十七日に後堀河院が臨幸され、馬場で競馬が行われ、馬場舎東面泉座にて殿上人に給膳されたことが『明月記』にみえる。また、建長七（1253）年六月五日にも後嵯峨院の御幸を迎え同所で競馬が行われている〔百練抄〕。

『山州名跡志』に、同地は古庭池跡であるといい、近年まで池がのこされていたという古老の言を伝えている。 （川上）

註

- (1) すべて京都市の遺跡台帳上の名称である。本書では各遺跡の性格を簡潔に表わすため農学部、植物園、追分地蔵、教養部、病院内遺跡の名称を用いる。
- (2) 京都大学本部地区のキャンパスを通称として、北から北部、本部、西部、教養部、南部、病院の各構内に分けて呼ぶ。
- (3) 南西端が国土座標（108, 100 19, 50）になるグリッド。なお記号は、アルファベットの前がBの場合北部校内を、数字が20以下の場合西部、医学部、病院構内を示すように使用した。
- (4) 『京都坊目誌』に文久二年設置、明治3年廃止とある。

- (5) 『兵範記』久寿二年十二月十七日条。
- (6) 『東寺文書』応永三年十二月十八日將軍義持御教書。
- (7) 仁平二年八月二十八日条。
- (8) 白河御所・御堂については〔杉山62〕に詳しい。
- (9) 『兵範記』保元元年七月十一日条。
- (10) 藤原顕頼は白河法皇の近臣で天下の政此人一言也、威振一天、富満四海と評された顕隆の子で、鳥羽法皇の近臣であり、父と同様に院別当として権勢を振り、法皇のために鳥羽、白河両御所に御堂、塔を造建している。
- (11) 病院構内北部の西に隣接する薬学部、東南アジア研究センター、吉田西寮、看護婦宿舎が所在する地区は旧京都織物株式会社本社の跡地であり、同社は明治20年の創設。この同じ土地に明治5年2月に官学牧畜場が設立されており、同場の民営移行と縮少によって、その跡地を京都織物が入手した。また、さらにさかのぼると、明治初年には同地は府兵の操練場にあてられていた。

参 考 文 献

- 梅原末治 1923年「京都帝国大学農学部敷地石器時代遺跡」『京都府史跡名勝地調査報告』第5冊。
1935年「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第16冊
- 小野山節 1973年『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 佐原真 1960年『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部。
- 島田貞彦 1924年「京都市北白川町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻5号。
- 杉山信三 1954年「吉田寺について」『史迹と美術』24の242。
1957年「後高倉院の御葬地、北白川について」『史迹と美術』27の278。
1962年『院の御所と御堂』『奈良国立文化財研究所学報』第11冊。
- 中村徹也 1972年『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
1973年『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
1974年 b 『京都大学理学部ノートバイオロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要』
1975年『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
1976年『京都大学教養部A号館増築予定地内埋蔵文化財調査の概要』
- 福山敏男 1977年「室町時代の神社一特に吉田社と斎場所」『日本の美術』
- 藤岡謙二郎 1973年「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理的意義」『人文』19集